

目次

〈マンガ〉 鳴子の米プロジェクト

ゆきむすびものがたり——はじまりの1年—— 佐藤 ジュンコ 4

はじめに 12

1部 「鳴子の米プロジェクト」とはなんだったのか

鳴子の米プロジェクトのはじまりとこれから 安部 祐輝 18

小さな村から国を問い直す——「鳴子の米プロジェクト」が目指したこと 結城 登美雄 45

地域が育んだ新しい米品種——「ゆきむすび」が誕生するまで 永野 邦明 81

鳴子の米プロジェクトは

なぜ特色あるCSA（地域支援型農業）になったか 中川 恵 88

2部

プロジェクトのここに注目する

- 小さな社会だからこそできる価値づくり——「鳴子の米プロジェクト」に思う 宮口侗迪 96
- 「支え合うタネと人」と「食料主権」の視点から
- 米づくりを通じた食と農のシステム変革への挑戦 西川芳昭 102
- 地域学習の視点から
- 地方のひっ迫を招いた社会・経済の仕組みをアップデートしていく共同と協働 石井山竜平 110
- 若者を育てる視点から
- 地域と若者の「二重らせん型成長」 守友裕一 118
- 観光業と農業をつなぐ視点から
- 米を真ん中に温泉地の食を深めたい 桑野和泉 124

3部

地元学としてのプロジェクト——過去から未来へ

- 地元学としての「鳴子の米プロジェクト」 西大立目祥子 130
- 「令和の米騒動」があるうとも、米プロはぶれずにすすむ
- NPO 法人鳴子の米プロジェクト理事長 上野健夫さんに聞く 148

おわりに 154

●コラム

- 昔からの棒掛けでの米づくり 高橋正幸さん 44
- 食べものがあつての器 小野寺公夫さん 80
- それまでのつながり経験が米プロに結集 板垣幸壽さん 101
- 気になるニュースが増えてくる 佐藤友恵さん 109
- 炊飯実験から夜中の会合まで 高橋とみえさん 117
- 鳴子の米と「おむすび権米衛」がつながって 林田悠子さん 123
- 米が主役のおむすびに 伊藤沙織さん 147
- 鳴子の米プロジェクトのご案内 156
- 執筆者紹介 158

はじめに

「つながるごはん」というタイトルからどんなことを連想するだろうか。スーパーマーケットに積み上げられた、2kg入りとか5kg入り袋の米と私たちは、産地というブランドと値段を介した関係にすぎない。つきつめれば「高いか安いかわ」「うまいかまずいか」だけだ。それぞれの米の背後には農家がいる、生産の現場である田んぼがあり、その周辺には地域の山や川があり、農地を生み出してきた歴史や文化がある。米のうまさだって、炊き方、食べ方によって一概にいいないはずだ。しかし、現代の消費者である私たちは、そうした米の向こう側とはすっかり切り離されている。

いま、ごはん茶わん1杯分の米が、何株の稲から穫れるかいえる人はどれだけいるだろうか。

「そんなことまで考えてごはんが食べられますか」という方がいるかもしれない。だが、まさにそれをやろうとした取り組みがあった。2006年に旧鳴子町（現宮城県大崎市）で立ち上がった「鳴子の米プロジェクト」がそれである。

2006年とはどういう年であったか。

図はこの35年ほどの米の価格の推移を示しているが、主食用米の価格は1994年をピークに下がりが続けてきた（令和の米騒動で米の価格が高騰したというが、30年前の価格水準を回復したにすぎない）。2006年には1万5000円代にまで下落、これは農協から卸への取引価格だから農家

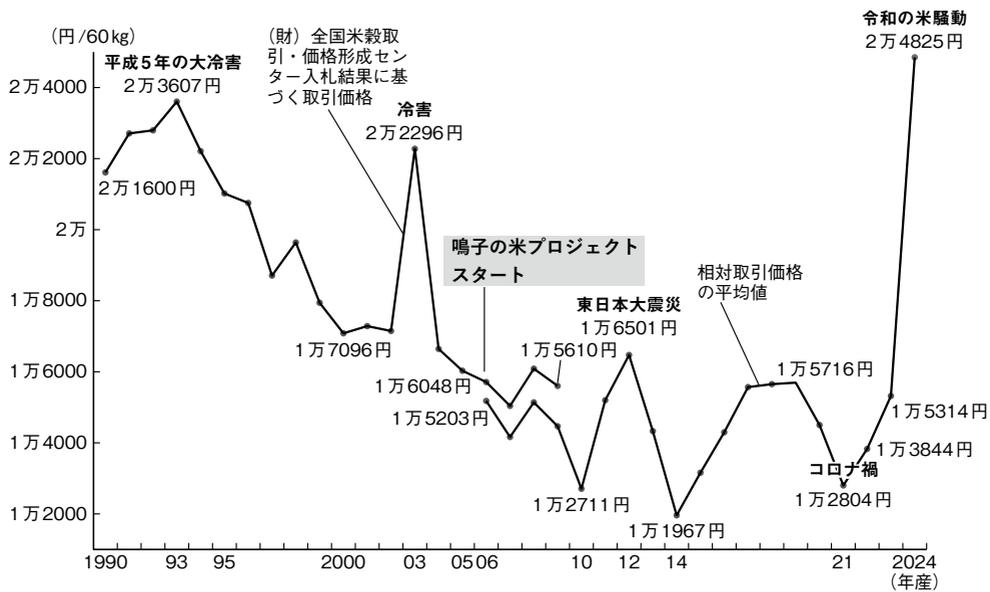


図 主食用米価格の推移

出典：農林水産省

の取り扱いはもっと少なかった。翌2007年には「品目横断的経営安定対策」がはじまる。この政策を簡単にいえば、構造改革（規模拡大）を加速するために、4ha以上の認定農業者や20ha以上の集落営農といった「担い手」に国の支援対象を絞り込むというものだった。鳴子のような中山間地域の規模の小さいところでは米づくりの存続そのものが危ぶまれる状況だった。

そうしたなか鳴子では、なんとか米を中心とした持続可能な農業のかたちを見出そうという動きがはじまった。まず、農業試験場で開発されたものの埋もれていた米を、地域の力で新しい品種として世に送り出した。魚沼コシヒカリを頂点とするブランド米とは無縁の、山間の高冷地に向けた冷害に強くおいしい米「ゆきむすび」の誕生である。その米を1俵（60kg）2万4000円（農家手取り1万8000円）で予約販売する。ごはん茶わん1杯に換算すると24円だ。農家はもちろん、鳴子の行政職員、温泉関係者など地域住民

が一丸となって、このプロジェクトを後押しした（そのはじめの1年の経過は巻頭のマンガをお読みいただきたい）。

予約者は仙台圏や古川市などの住民が多く、田植えや稲刈り交流会に参加した人びとは、ごはん（米）の向こう側にある農家やその営みを日々気にするようになったという。

つまり、米を間にはさんで、「つくり手」（農家）と「食べ手」（消費者）がつながったのである。

本書の構成を紹介しよう。「1部 『鳴子の米プロジェクト』とはなんだったのか」ではこのプロジェクトが立ち上がった背景とねらいを、仕掛け人と総合プロデューサーの立場から解説する。また、「ゆきむすび」という品種が公的研究機関と地域の協働によって生み出された過程を開発者自身が振り返り、その米を核として、なぜ鳴子が独自のCSA（地域支援型農業）として発展をとげたかを掘り下げる。

「2部 プロジェクトのここに注目する」では鳴子にかかわった識者が、それぞれ専門の視点からこのプロジェクトの意義を深掘りする。過疎地振興、タネと人との関係や食料主権、社会学習、若者の成長、温泉地の観光と農業のかかわりといった多角的視点から光が当てられる。

このプロジェクトは中山間地域で持続可能な稲作を実現するということにとどまらなかった。四季折々、地域の自然の産物を生かしながら、米を中心にどのような暮らしが営まれていたか、そして、江戸期から戦後開拓にかけて農地をどのように拓き、田んぼの生命線である水をどのようにして引いてきたか——つまりは米と田んぼにまつわる暮らしの全体像を過去にさかのぼって掘り下げたのである。「ないものねだりではなく、あるものさがし」とは、このプロジェクトのプロデューサーでもある結城登美雄さんが提唱する「地元学」のキャッチフレーズであるが、鳴子の米プロジェクトは地元

学を強く意識していた。

そこで「3部 地元学としてのプロジェクト―過去から未来へ」では暮らしの聞き取りの中心となってきたアドバイザーが、その実践とそこから見えてきた豊かな農と食の世界を紹介する。

最後は、鳴子の米プロジェクトがなぜ20年も持続したのか、令和の米騒動に直面するなかで、どこへ向かおうとしているか、NPO法人鳴子の米プロジェクト理事長のインタビューでしめくくる。

このプロジェクトは東北の小さな取り組みである。しかしその目指すものは日本全体を見据えている。結城さんの言葉を借りれば、「小さな村から国を問い直す」のである。本書が一助となつて、鳴子と同様の取り組みが日本の津々浦々で生まれ、地域の農と食が「つながる」ことを願ってやまない。

2025年11月

農山漁村文化協会

鳴子の米プロジェクトのはじまりとこれから

NPO法人鳴子の米プロジェクト理事 安部 祐輝

2006年に始まった鳴子の米プロジェクト（以下、米プロ）が20年目を迎えた。20年といえば長いですが、自分にとってはあっという間だった。行政の立場から米プロを立ち上げ、現在もNPO法人理事として関わり、鳴子のみんなと一緒に地域づくりを実践してきたものの視点から、米プロのはじまりから今に至るまでを振り返ってみたい。

1 米プロがはじまる前に

国の政策が合わない山間地の農業

私はもともと鳴子出身ではなく、縁があって鳴子に移住し、1996年に鳴子町の職員となった（2006年には鳴子町は合併して大崎市に）。はじめは社会教育分野として4年間公民館を、その後、行政職としては珍しく、農政分野を連続25年担当している。公民館での地域づくりに関わった人たちとのつながりは今も続いており、そのときの経験が地域での人づくりや社会教育の考え方の基本になっている。

2000年からは農政担当となったが、大学時代は農学部に在籍したものの、農政はほぼ学んでおらず、国、県、市・町の流れで落ちてくる仕事をこなし、何もわからず米の生産調整（米が余剰にならないように、農家に水田の転作や休耕を促し、生産量を制限する国の政策）を3年ほど担当し進んだ。政策説明のため集落座談会を開くのだが、生産調整する田んぼの面積が増え続け、米の値段が下がるなか、集まる農家は悲しそうな顔ばかりでやる気が失われているようだった。いっぽう、仕事で秋田県境にある山間の鬼首おにこうべを訪ねると、ここではいつも農家の女性たちが手づくりの漬物などで温かくもてなしてくれ、まるで時間が止まったかのようにリラックスできた。そうした経験から、そもそも山間地の鳴子には国の政策が合っていないのではないか、国の政策からまれてしまう鬼首のような地域を元気にすること、この人たちのために役に立つことこそが山間地の役所の仕事ではないかと、考えるようになった。

どうしたら山間地の鳴子の農業を元気にできるのだろう。そこで、勤務時間後に公民館時代に知り合った地域づくりのキーマンの家をまわった。夜の訪問はたぶん迷惑だったと思われるが、そこでさまざまなアドバイスをもらった。その中で、九州での先進的なグリーン・ツーリズムの動きや、農文協の『増刊現代農業』に掲載された民俗研究家の結城登美雄さんの実践、隣町の宮崎町（現在は加美町）で開催された食の文化祭の記事を見せてもらった。掲載されていた農家の女性たちはみんなすてきな笑顔だった。農産物が遠い市場で判断されるのではなく、生産現場で交流しながら、消費者と生



結城登美雄さん

産者とて農業や食を一緒に考えるグリーン・ツーリズム、これを鳴子でやりたいと思った。

米がよくなると農業はよくなる

そこで、アドバイスをくれた人たちに協力してもらい、全国レベルのグリーン・ツーリズムの実践者を講師に、農業・観光業・商業の異業種で学ぶ「鳴子ツーリズム講座」を鳴子町として開催した。この講師の一人が結城さんで、米プロとの関わりはここから始まっている。その後、第1回「全国グリーン・ツーリズムネットワーク熊本水俣大会」に仲間たちで参加し、その勢いで手を挙げ、第2回の大会を鳴子に誘致、鳴子ツーリズム講座の参加者を中心に民間主体の「鳴子ツーリズム研究会」を設立した。研究会では、田んぼ湯治（後述）、スローライフ週間などの実践を重ね、第2回「全国グリーン・ツーリズムネットワークみやぎ鳴子大会」を2004年に行政と研究会の協働で開催した。

グリーン・ツーリズムの取り組みの目的は山間地の農業振興だったが、第2回大会終了1年後の2005年の反省会の場で、結城さんから「ツーリズムで人が来るようになってよかったけど、農業全体はまだよくなってないんじゃないか?」、さらに「米がよくなると農業はよくなるんじゃないか?」と問われた。鳴子では、畜産や花卉が専業農家の経営の中心であっても、農家のほとんどは米をつくっている、つまり、米づくりがよくなるのが農業振興

に必要なのではないか、というのだ。これまで地元の農協からは、鳴子でとれた米はおいしくない、売れないと言われて、いつもくやしき思いをしていた。鳴子でおいしい米がつけられたら、農家もやる気になるに違いない。

「各県の試験場ではコシヒカリ以上にいい米がたくさんあるが、県の理由で世の中に出してもらえず、開発している職員はくやしがつている。古川農業試験場にも山間地向けの米もあるはずだ」と結城さんが重ねていわれた。鳴子にはツーリズム研究会で培った異業種の協働の体制があり、結城さんから学んださまざまな地域の実践を活かせれば、鳴子でおいしい米づくりを中心にした地域づくりができるはず、まだ予算も何もない状態だったが、やるべき、やりたいと思った。

2 新しい山の米「東北181号」の試験栽培 ——新品種「ゆきむすび」の誕生

古川農業試験場で見つけた「東北181号」

その日のうちに、知り合いの県の農業改良普及センターの職員に問い合わせ、翌日、品種として登録されていない山間地に合う米があるようだと言われたので、さっそく古川農業試験場に行ってみた。

古川農業試験場では、「ササニシキ」や「ひとめぼれ」など、宮城県気候に合った米の品種を生み出している。紹介してもらった米は、山間地向けの早生のうるち米2種と低アミロース米（86ページの注参照）1種の計3種。観光客への提供などの利用の観点から、冷めてもかたくなるのでおむす



試験栽培 収穫した稲を杭掛けする



試験栽培 山に残雪が残るなかでの田植え

厳しい条件の田んぼでの試験栽培

試験栽培は2006年の春から始まった。栽培地は、鳴子の中で最も厳しい生育条件の田んぼを選ぶことにした。その田んぼでも育つのであれば、これまで栽培に苦労してきた農家にも希望が見えるからだ。そこで、鬼首神楽保存会会長や鳴子ツアーリズム研究会の会長も務めている鬼首のリーダー・後藤錦信かねのぶさんに相談にいき、鬼首の奥地で、栽培が難しいといわれている田んぼを持つ農家を紹介してもらった。曾根清さん、高橋繁俊さん、高橋正幸さんの3人だ。錦信さんの家に集まっていただき、この取り組みのねらいを説明し、試験栽培をお願いしたところ、曾根さんから「よし、わかった。杭掛けでやってやる」という心強い言葉をもらった。杭掛けとは、刈り取った稲を手で杭に掛けて天日干しする手間のかかる乾燥法だが、鬼首に残る秋の風景で、稲がゆっくり乾燥し、米もおいしくなる。

びなどに向く、低アミロース米「東北181号」を選び、これを鳴子で試験栽培をさせてほしいとお願いした。実はそこから簡単ではなかった。地域の現場から試験栽培を依頼されること自体、県では初めてで、おいそれとは許可できないといわれたのだ。ただ、そこからあきらめずに、農家とも一緒に何度も試験場に通り、「これからの鳴子の農業のために、この米が絶対必要なのだ」というこちらの思いを話した。

最後には、県から試験栽培はやってほしいが、新しい品種のために種もみを増産するような予算はないので、品種登録するのは難しいかもしれないといわれた。ただ自分としてはそれでもいい。まずは試験栽培し、鬼首のような山間地でもおいしい米をつくることに挑戦したいと思った。その米を炊いておむすびにして、みんなに食べてもらう。それが農家の力になり盛り上がりをつくり、流れを変えることで品種登録につながるかもしれないと考えた。